〈成り済まし〉の理論

—フォーマル・セオリーをめざして—

海　野　道　郎*

§0．序：本論文の目的と構成

＜成り済まし＞とは何か。*1

それは，マイノリティーの成員が他の人間ないし社会的単位によってマジョリティーの成員であると誤認される現象である，と暫定的に定義しておこう。

無論，現実のマイノリティー・マジョリティー関係は，＜成り済まし＞に尽きるものではない。マイノリティー（の成員）は，現実の抑圧的状況に対して，様々な対応をすることが知られている。たとえば，Berry and Tischler, 1978（387－402）によれば，それは，次のように類型化される。

1）甘受（acceptance）

抑圧に対して，恨んだり報復しようと思ったりせずに，不公平に耐える。

2）逃避（avoidance）

抑圧者と接触しないで済むような所に逃れる。

3）同化（assimilation）

ドミナント・グループの中に溶けこもうとする。

4）攻撃（aggression）

ドミナント・グループに対して，不利益をもたらすことを目的とした行為を行なう。

そして，＜成り済まし＞は，同化の一形態として位置づけられている。*2

*　関西学院大学社会学部

本稿は，マイノリティー・マジョリティー関係についての一般理論構築の一環として，＜成り済まし＞の性質を明らかにし，この現象の生起に関する理論モデルを提唱することを意図している。

§1．＜成り済まし＞とは何か

本稿の冒頭において，われわれは，＜成り済まし＞の暫定的定義を与えた。本章の目的は，＜成り済まし＞と呼ばれている現象について，その種々の例，類型化，本性の分析によって，暫定的定義に実質的意味を与えようとするものである。

§1．1．＜成り済まし＞の種々相

＜成り済まし＞は，原理的に，ほとんどすべてのマイノリティー・マジョリティー関係において起りうる現象である。事実，以下に述べるような種々の例が報告されている。*3

§1．1．1．アメリカの白い黒人

＜成り済まし＞の例として最もよく知られているのが，アメリカ（U. S. A.）の黒人である。

アメリカにおいて黒人の＜成り済まし＞が問題となるのは，一つには黒人が次のように定義されているからである。すなわち，黒人とは，黒いアフリカ人（black African）の血をいささかでも受けついでいるすべての人間である，と伝統的に定義されているのである（van den Berghe, 1978：79. Drake and Cayton, 1945：159)。したがって，次のようなことが生じる。「私の目は空色，髪の毛は薄茶色，顔立ちは疑いようもなくノルウェー系で，膚は白い。でも私の血管の中には黒人の血が数滴流れている。だからアメリカでは，私は黒人だ」(Stonequist, 1937：189)。ドミナント・グループの勢力が強いときには，彼らは自分達の都合いいように，カテゴリーの境界を決定する（Hughes and Hughes, 1952：103)。アメリカ黒人の定義は，そのようなものの典型である。*4

さて，そのような白い黒人は，次のようないろいろな場面や方法で，白人に

＜成り済ます＞。

〔例１．１〕気づかぬうちに，白人と間違われる。

ある若い（白い黒人）女が，ケンタッキーにいる父親に会いに（おそらくシカゴから－海野）汽車に乗った。途中の駅で乗り換える時，ポーターが彼女の荷物を持ち，客車に案内してくれた。彼女は，そのポーターに何の注意も払わなかった。当然正しい（つまり黒人用の）座席に連れて行ってくれるものと思っていた。ところが，客室に足を入れた時，ポーターが誤りを犯したということに彼女は気づいた。そこに座っているのは，全部白人だった。(Drake and Cayton, 1945 : 160)

〔例１．２〕路面電車の中で黒人席にいたのに白人と間違われる。

白い「黒人」少女が路面電車の後部座席（つまり，黒人用の座席）に座っていたところ，車掌が来て，前の方の（白人用）座席に座るように言った。本人は口ごもったが，その少女を知っている女が，この子は黒人だと車掌に告げた (Stoneguist, 1937 : 187)。

〔例１．３〕白人用の写真館と知らずに行く。

ある白い黒人女が，白人専用の写真館に行って写真をとってもらった。何事も起らなかった。後日，娘をつれて，その写真館に行った。(その娘は，一見して黒人の顔をしていた。) すると写真屋は，その娘の写真をとることを拒否し，自分は黒人の面倒はみない，と女に告げた。それを聞いて初めて，女は，この写真館が白人専用のものだということに気づいた。そして，前回ここに来た時，自分が無意識のうちに＜成り済まし＞ていたことを知った。(Drake and Cayton, 1945 : 160)

〔例１．４〕白人専用の美容室に行く。

少女が，友人にそそのかされて，白人専用の美容室に行った。美容師は，赤褐色 (auburn) の髪の毛をみて，この店で出来ることは何でもしてあげましょう，と言った。だが，美容師たちは，雑談の中で，黒人 (coloured people) にはどんな仕事も一切ことわる，と話していた。少女は，「あなたはいま『黒ん坊

("nigger")』のために仕事をしているのよ。」とさけび出したくなった (Stonequist, 1937 : 187－188)。

〔例1．5〕劇場に白人として入る。

別の白い「黒人」少女も，色が非常に白くて，白人に<成り済ます>ことができる。彼女はこれまで数回，劇場に白人として入ったが，別にそれを何とも感じていない。

「他の人種に属したいとは，これまで一度も思ったことがないから」だという。だが，彼女は，「あなたは，白人に間違えられたいと思う？」という問には，「ええ」と答えている。(Stonequist, 1937 : 147)

〔例1．6〕楽しみのため，常に白人用ダンスホールに行く。

ある，色の白い黒人少女が，これも<成り済まし>の可能な白い黒人の男といっしょに，ある夜，白人用のダンスホールに行った。楽しかった。それに黒人用のダンスホールよりも高くはなかった。そこには黒人のウエイターもいなかったから，<成り済まし>が見つかる心配もなかった。その時以来，その少女は，その男とダンスに行く時には，いつも白人用のに行った。(Drake and Cayton, 1945 : 162)

〔例1．7〕黒人だと言っても冗談だと思われる。

ある黒人の男が白人の友人と高級クラブに行った。友人がマネージャーに，「こいつは黒人なんだ」と紹介したが，マネージャーは冗談だと思って信用しなかった。(Drake and Cayton, 1945 : 164)

〔例1．8〕黒人の青年が白人として学校に入学する。

アメリカの北部では，黒人の青年が白人として入学しようとすることが知られている。その学校が黒人の入学を拒否していたり，あるいは，黒人の入学は許可されるにしても，白人でいた方が居心地がよいからである。

だが，このような現象は，南部ではほとんど見られない。発覚した時の制裁が非常に大きいからである。(Myrdal, 1944, 685)。

〔例1．9〕昼は白人として働き，夜は黒人として暮す。

このパターンは，黒人の＜成り済まし＞の１つの特徴ともいえるもので，しばしば言及されている（Stonequist, 1937 : 194. Myrdal, 1944 : 685. Shibutani and Kwan, 1965 : 530. Parsons, 1975 : 76. van den Berghe, 1978 : 138)。昼間，白人として働くのは，良い仕事や高い賃金を得るためであり，夜，黒人として，黒人居住地区に住むのは，黒人の世界の方が楽しいと思っているからである。*5 このような＜成り済まし＞を行なっている人間は，この職業のための＜成り済まし＞を，「偏見が存在するからだ」と正当化できる（Stonequist, 1937 : 174)。

〔例１．10〕黒人であることを子供に知らせない。

自分自身が白い膚の黒人の両親は，自分たちが黒人であることを子供に知らせずに育てることがある。子供は，自分は白人だと信じるようになる。(Walter, 1952 : 308)。

§１．１．２．アメリカのユダヤ人

ユダヤ人（Jew）は，アメリカ（U. S. A.）において，比較的容易に＜成り済まし＞ができる。文化変容（acculturation）のために，他のアメリカ人と区別するものが，ユダヤ人としての自覚だけになったからである。ユダヤ人が非ユダヤ人に＜成り済ます＞際に用いる方法には，名前の変更，食物に関するタブーを守らないこと，宗教的儀式の変更，などがある(Shibutani and Kwan, 1965 : 521)。

〔例２．１〕異邦人（非ユダヤ人）に＜成り済まし＞て職を得る。

あるユダヤ人が，シカゴで職さがしをした。どこにいっても，ユダヤ人だとの理由で，断られた。そこで，名前や国籍などを変えて別の会社に行き職を得た。

彼は，ドイツ人のような顔をしているので，＜成り済まし＞は容易だった。しかし，異邦人の中には，彼の勤勉さをねたむ人間もいた。彼らは，「おまえはユダヤ人じゃないのか」などといやがらせを言った。彼は，職を確保するために口では自分がユダヤ人であることを否定したが，ユダヤ人であることには誇りを持っていた（Stonequist, 1937 : 194－195)。

〔例2．2〕異邦人に<成り済まし>て職を得，結婚する。

あるユダヤ人が，「アメリカ人」になろうと決心した。彼は，法的に名前を変え*6，自分の経歴を偽造した。ユダヤ系でない，アドリアノープルのトルコ人，ということにしたのである。まず，西の方の見知らぬ土地に行き，種々の職業を探したが，ユダヤ人が好みそうな仕事は避けた。自動車修理工や農夫，工員などをやったのである。二年間働いて金をためた後，西部のさる大学に，ただのアメリカ人として入学した。その大学を卒業して間もなく結婚し，今は子供を育てている。子供たちは自分達の父親がユダヤ人であることを知らない。彼は言う。「人生は素晴しい。私は自分のしたことを後悔していない。」(Berry, 1958：489－491) *7

§1．1．3．アメリカにおける他の例（移民，黒い黒人，白人）

アメリカにおいて知られている<成り済まし>には，白い黒人やユダヤ人の他にも，種々のものがある。

〔例3．1〕黒い黒人は，フィリピン系，スペイン系，アメリカ・インディアン，メキシコ系，インド人，エジプト人などに<成り済ます>（Myrdal, 1944：129)。

〔例3．2〕アメリカ・インディアンは，色の浅黒いヨーロッパ系の子孫に<成り済ます>（Berry and Tischler, 1978：392)。

白人が黒人に<成り済ます>という現象も，例外的には存在する。

〔例3．3〕黒人と結婚した白人女が黒人に<成り済ます>，という例が知られている。このような<成り済まし>が生じるのは，自分は黒人だということにしていた方が便利だからだといわれる（Myrdal, 1944：1380)。

〔例3．4〕黒人に<成り済まし>て黒人ホテルに泊る。

社会学者のロバート・パークが，ある町に泊まろうと思ったが，白人用のホテルはすべて満員だった。そこで黒人に<成り済まし>て，黒人用のホテルに泊った。(Drake and Cayton, 1945：164)

〔例3．5〕ドイツ系の人のアメリカ化は，名前を英語風にし，帰化し，宗派

の変更（たとえば，ルーテル派からメソジストに）することによって行なわれる。これらは，比較的簡単である。しかし，言葉のなまり，文化の差，地域の人達が以前のことを知っていること，などによって，イギリス系の人間に<成り済ます>ことは，それほど容易ではない。しかし，ドイツ系の人間のアメリカ化は，ドミナント・グループ（イギリス系）からは歓迎されるので，イギリス系に<成り済ます>必要は，必ずしも存在しない（Zanden, 1966 : 403－404. Berry and Tischler, 1978 : 392)。

いま述べたドイツ系は，移民の一例だが，その他にも，次のような例が知られている。*8

〔例3．6〕イタリヤ人*9が，シカゴのユダヤ人居住地区において，ユダヤ人に成り済ます。

〔例3．7〕ポーランド人が，ドイツ人達の中で，ドイツ人に成り済ます。

〔例3．8〕スエーデン人がアイルランド人の野球チームの中で，アイルランド人に成り済ます。

〔例3．9〕ドイツ人が，第一次世界大戦中，アメリカの敵国であるドイツの出身であることを隠し，スカンジナビア人かオランダ人に成り済ます。

§1．1．4．メキシコにおける<成り済まし>

植民地時代のメキシコ社会は，次のような五つの階層で構成されていた。

1）ユーロピアン・スパニアード（European Spaniard)。ヨーロッパからきたスペイン人で，少数（1パーセント以下)。大部分が男。

2）アメリカン・スパニアード（American Spaniard)。クリオロ（criollos）とも呼ばれる。新世界で生まれ，完全にスペイン化した人々で，白人とみなされた。一部は正真正明の白人だが，大部分は，メスティーソ（後述参照）との混血で，スペイン人の父親に認知され，スペイン人として育てられたもの。

3）メスティーソ（mestizos)。スペイン人とインディアン（インディアン・メスティーソ)，あるいはインディアンと黒人（アフロ・メスティーソ）と

の間の子で，法的に認知されないもの。あるいはその子孫など。これは残余カテゴリーで，現在，人口の85パーセントを占める。

4）インディアン（Indians)。メキシコの原住民。

5）黒人（Negro)。アフリカから連行された黒人。このカテゴリーが最下層をなす。

しかし，この五つの階層は，階層間の混血のために境界線が不明確になっている。事実，18世紀末にはクレオロとメスティーソの差異が，19世紀初めには，インディアン・メスティーソとアフロ・メスティーソとの差異が，それぞれ非常に微少になった。そのために，次のような＜成り済まし＞が容易に生じることになる。*10

〔例4．1〕下の方の階層の者（メスティーソ）がクリオロに成り済ます。

〔例4．2〕アフロ・メスティーソが，インディアンやインディアンと白人との混血に成り済ます。（これは，インディアンの「血」の方が，ニグロの「血」よりも上等だと考えられていたためである。）

§1．1．5．ブラジルにおける＜成り済まし＞

ブラジルでは，白人と原住民や黒人との混血が進んだことと，人種の定義が社会的に不明確なこと*11が相まって，次のような＜成り済まし＞が存在する。*12

〔例5．1〕社会経済的地位の高いものが「社会的白人 "social white"」になる。

このように，ブラジルにおいては，白人に＜成り済ます＞ことは，比較的容易である。この社会移動によって，人種上の低い地位がある程度克服される。事実，ブラジルには「金持の黒人は白人で，貧乏な白人は黒人」という言い方さえ存在する。

1941年の推定では，白人は人口の44.4パーセントだが，これは何らかの生物学的分類によって得られた数字ではない。むしろ，広範な＜成り済まし＞によって生じたものであって，先祖にヨーロッパ系の方が多い人のほとんどすべて

を含む，包括的な社会的カテゴリーなのである。

§1．1．6．南アフリカ共和国における＜成り済まし＞

南アフリカの人口は，1960年現在，白人（19.4％），アジア人（3.0％），ケープ・カラード（9.4％），アフリカン（68.2％）という構成になっている（van den Berghe, 1978：102)。ここで，ケープ・カラードというのは，オランダ人とホッテントット，マレー人などとの混血によって生まれた人々であり，アフリカンというのは，バンツー族系の人々である（van den Berghe, 1978：98－99)。このような社会において，次のような＜成り済まし＞の起っていることが知られている（van den Berghe, 1978：102)。

〔例6．1〕色の白いカラードから白人へ

〔例6．2〕アフリカンからカラードへ

もっとも，大部分のカラードには，隠し切れない人種的特徴があるという(Berry and Tischler, 1978：208)。　しかし，白人に成り済ませられる人間は常に人種の境界（color line）を横切っており（Stonequist, 1937：18)，その数は非常に多い（van den Berghe, 1978：98)。そこで，白人は，人種の境界がくずれるのを，恐れるようになる（Stonequist, 1937：18)。この結果として生まれたのが，1950年制定の「人口登録法（Population Registration Act)」である。これは，＜成り済まし＞の予防のために制定されたもので，人々は，生まれた時から4つのカーストのいずれかに所属し，それは一生変更できない。身分証明書に，その人の人種が記されているので，＜成り済まし＞は，技術的に不可能なのである。

§1．1．7．インドにおける＜成り済まし＞

インドには，ユーラシアン（Eurasian, またはAnglo-Indian）と呼ばれる人達がいる。彼らは，ヨーロッパ人とインド人の混血である。

〔例7．1〕色の白いユーラシアンは，イギリス人に成り済ます。だが，この行為は，残された人々のうらみを買うことになるという（Stonequist, 1937：15)。

われわれは本節において，＜成り済まし＞のさまざまな例を概観した。次節では，これらを参照しつつ，＜成り済まし＞の次元について検討しよう。

§1．2．＜成り済まし＞の次元

初めに，＜成り済まし＞の次元について，既存の文献にどのように言及されているかを調べてみよう。

Stonequist (1937) は，この問題について，組織的な記述を行なってはいない。しかし，彼が種々の例を提示するなかで，「経済的な理由によって昼間仕事をしている時だけ＜成り済ます＞のか，永久に黒人を見すてるのか」(p. 190)，「永続的（permanent）あるいは，単に一時的（temporary）な＜成り済まし＞」(p. 191)，「部分的 (partial) ＜成り済まし＞」(p. 195)，「＜成り済まし＞は一般に意識的 (conscious) かつ故意的 (deliberate) のものである」(p. 194)，「見まちがわれることによって生じる＜成り済まし＞」(p. 195) などと述べていることから，われわれは，＜成り済まし＞の次元として，次のようなものを抽出できる。

1）時間（一時的か永続的か）

2）空間（部分的か全体的か。すなわち，社会生活の一部――たとえば職業生活――においてだけ＜成り済ます＞のか，すべてにおいて＜成り済ます＞のか。）

3）意図（意図的に＜成り済ます＞のか，相手の誤認により，結果的に＜成り済まし＞たことになるのか。）

Wirth and Goldhamer（1944）は，次のような次元を記している。

1）生活の一部分だけ（たとえば，職業，あるいはレクリエーション）か，完全か。

2）一時的か永続的か。

3）意図的（intentional）か非意図的か。

4）本人が自分についての知識（黒人か否か）を持っているか否か。

5）個人的か集合的か。

これは，かなり包括性の高い次元抽出であろう。

Drake & Cayton（1945：160－163）によれば，＜成り済まし＞には，さまざまな段階がある。この段階は，黒人集団に対する疎遠の程度と，白人の集団に対する情緒的同一化の程度によって決まる。彼らが提示したのは，次の五段階である。

1）知らずに白人と誤認される。

（例）列車の中。（白黒共用の）レストランで。知らずに白人専用の写真屋に行く。

2）便宜上の＜成り済まし＞

（例）白人専用の美容院の方が安くてサービスも良く，しかも待たなくてよいので，そこに行く。

3）楽しみのための＜成り済まし＞

（例）冒険好きの人が，連れだって，白人専用のダンスホールにいく。白人をだますのが面白い。

4）経済的必要性ないし便宜のための＜成り済まし＞

これは，比較的上層の黒人に見られる現象である。黒人に閉ざされているホワイトカラーの職業に就くために，白人に＜成り済ます＞のである。

5）完全な＜成り済まし＞

アメリカの黒人にとって，この行為は，社会的な死と再生を意味する。すなわち，彼は，自分の学歴(黒人の学校を卒業した場合)，親友，家族，職歴などを失なわなければならないのである。

Drake and Cayton がこのように，＜成り済まし＞の類型を段階化したことは，ダイナミック・モデルの構築に示唆を与えるという意味において重要である。しかし，各段階の内容に立ち戻って検討してみると，この段階というのは，真の意味で段階とはなっていないようである。すなわち，この5つの段階の間には，

1→2→3→4→5，あるいは，

$$\begin{matrix} 1 \searrow \\ 2 \nearrow \end{matrix} 3 \rightarrow 4 \rightarrow 5$$ という関係は，

必ずしも存在しない。たとえば，一度も楽しみのための<成り済まし>(3)をしたことのない人が，職業上では白人に<成り済ます>(4)ということは，十分考えられる。

その後の研究の中には，これまで述べてきたものを陵駕するようなものは見当らない。[*13]そこで，以上の準備のもとに，<成り済まし>の次元を抽出しよう。

まず，Stonequist (1937) からわれわれが抽出した三つの次元は，すべて Wirth and Goldhamer (1944) に含まれている。Drake and Cayton (1945) のものは段階的類型であるから，ここから次元を抽出すると，Wirth らの提唱したものの他に，「目的」という次元のあることが分かる。

そこで，われわれの知り得たかぎりでは，<成り済まし>を特性づける次元の和集合は，Wirth らの提唱した五つの次元に，「目的」という次元を加えたものになる。

しかし，これで問題はないのだろうか。「時間」と「空間」については，本来は連続的な変数だが，操作の便宜上，二値変数として扱うのも許されよう。<成り済まし>行為者の「単位」については，1人，2人，……，n人（nはその社会のマイノリティーの人数）の可能性があるわけだが，1人かそれ以外かという二値変数として扱いうる。「目的」は，Drake らのように「便宜」，「楽しみ」，「経済的理由」などをそのままにしておくと，名義変数となって，非常に扱いにくい。何らかの効用関数を用いて変換すれば扱いやすくなるが，われわれとしては，この「目的」という変数の採用を拒否したい。<成り済まし>には，先に言及したもの以外にも種々の目的がありうるから，それを名義変数として扱っていたのでは，理論化は覚束なくなる。また，「効用」については，後述のように，別の方法によってモデルに組み入れられる。

「意図」については，若干の検討が必要だと思われる。意図的＜成り済まし＞は，概念として明確である。だが，これまで無意図的＜成り済まし＞とされてきたもののなかには，次の四種類の例が含まれていることが分かる。

〔例a〕自分が黒人であることを知らずに，白人専用の美容室に行く。(〔例1．9〕の結果)

〔例b〕自分は黒人だということは知っているが，それが白人専用だということは知らずに白人専用の美容室に行く。

その人の外見は白人と区別できないので，店の人は白人だと思ってしまう。(〔例1．3〕と同型)

〔例c〕自分は黒人だということは知っているので，バスの中で黒人用の座席に座っていたら，車掌が前の方の(白人用の)座席に座われと言った。(〔例1．2〕)

〔例d〕駅で，どの列車が黒人用なのか分らずにウロウロしていたら，駅員がこっちに来いと言って，ある車両に案内した。気がついたら，それは白人用の車両だった。(〔例1．1〕と同型)

この四つの例からこれらが，1）自分についての知識（例：黒人である）の有無，2）その場についての知識（例：白人専用の美容室）の有無，3）同定に関する行為者の提案*14という三つの次元によって区別できる，ということが抽出される。すなわち，上に上げた四つの例は，次のように特徴づけられる(表1)。

＜表1＞　無意図的＜成り済まし＞の特性

次元＼例	例a	例b	例c	例d
1）自分についての知識	無	有	有	有
2）その場についての知識	有	無	有	無
3）同定に関する行為者の提案	白人	白人	黒人	無

さらに，表1に則して言うならば，意図的＜成り済まし＞というのは，1）

自分についての知識を持ち，2）その場についての知識も持ち，しかも，3）自分は白人であると行為者が提案する場合であることが分かる。

以上の議論によってわれわれは，意図および「本人の知識」という二つの次元が，表1に記した三つの次元によって，一層明確にとらえられる，ということを明らかにした。そこで，<成り済まし>を特性づけるための次元に関するこれまでの議論を整理すると，表2のようになる。*15

<表2>　<成り済まし>を特性づけるための次元

次　　元	カ テ ゴ リ ー*
1）時　　間	一時的——長期的
2）空　　間	部分的——全体的
3）単　　位	一人——集団
4）自分についての知識	黒人——白人
5）場についての知識	黒人用——黒白共用——白人用一無
6）同定に関する行為者の提案	黒人——無——白人

＊スペースの節約のため，黒人・白人と記したが，一般的には，それぞれ，マイノリティー，マジョリティーと考えればよい。

この次元を用いて，§1．1に記した例の一部を特性づけると，表3のようになる。

<表3>　<成り済まし>の例の特性

次元＼例	例1.1	例1.2	例1.3	例1.4	例1.5	例1.6	例1.7	例1.8	例1.9	例1.10
1	一時的	一時的	一時的	一時的	一時的	長期的	一時的	長期的	長期的	長期的
2	部分的	部分的	部分的	部分的	部分的	部分的	部分的	部分的	部分的	全体的
3	一　人	一　人	一　人	一　人	一　人	集　団	一　人*	一　人	一　人	一　人
4	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	黒　人	白　人
5	無	黒　人	無	白　人	白　人	白　人	(主に)白　人	白　人	白　人	—**
6	無	黒　人	白　人	白　人	白　人	白　人	黒　人	白　人	白　人	白　人

＊白人の友人と共に。＊＊すべての場で白人としてふるまうので、無関係。

§1．3．<成り済まし>の本質と定義

前節で議論した＜成り済まし＞の次元は，＜成り済まし＞の性質を明らかにしたものともいえる。しかし，それらは，いわば＜成り済まし＞の広がりを示すものであった。この節では，＜成り済まし＞の性質について従来述べられてきた議論を検討するとともに，＜成り済まし＞の本質を抽出し，定義を与える。

まず初めに，＜成り済まし＞は一般に個人的なことだ，という議論がある。たとえば，Berry and Tischler（1978：393）は，「コミュニティー全体が集団として白人ないしインディアンとして受けいれられることを獲得した例はあるが」といいつつ，＜成り済まし＞は一般に個人的なものであるとしている。ここで，コミュニティー全体の集団的＜成り済まし＞としては，Wirth らの報告（Wirth and Goldhamer, 1944）が想定されている。しかし，このように異議申し立てをした上での＜成り済まし＞は，われわれの考えによれば，白人が同定するカテゴリーを自主的に，あるいは強制されて変更した現象であって，後に定義する意味における＜成り済まし＞ではない。

それでは，集団的＜成り済まし＞というのは存在しないのだろうか。〔例1．6〕のような場合は，たったの二人ではあるが，集団的＜成り済まし＞と考えることができよう。しかし，高度の（永続的，全体的な）集団的＜成り済まし＞は困難であろう。発覚の確率が大きくなるからである。「黒人が集団として白人に＜成り済ます＞ことはできない。」（Myrdal, 1944：687）黒人全体が集団として白人よりも優勢（ないし対等）になるためには，＜成り済まし＞以外の手段によらなければならない。＜成り済まし＞は，van den Berghe（1978：138）も言うように，ある人間が，システムを変更することなしに差別を回避するだけであって，＜成り済まし＞が存在するからといって，人種的ないし文化的な裂け目が存在しないわけではないのである。

また，仮に単位が個人であっても，社会的に公認された移行は，＜成り済まし＞ではないとわれわれは考える。既に見たように（〔例5．1〕），ブラジルにおいては，社会経済的地位の高い黒人は「社会的白人」として扱われる。そこで van den Berghe（1978：69）は，白人集団への＜成り済まし＞は，アメリ

カ（U. S. A.）や南アフリカ共和国よりもブラジルの方が容易である，としている。しかし，この現象をわれわれは，「社会的白人という公認のカテゴリーへの移行」であると考え，＜成り済まし＞とは区別したい。

＜成り済まし＞は意図的なもの，という考え方もある。たとえば，Stonequist (1937：193－194) は，「同化は大部分は無意識的な過程であって，社会的な背景がただ消え去ることだが，＜成り済まし＞は一般に意識的で熟考のうえ行なうものである」と述べている。もちろん，高度の＜成り済まし＞は，意図的なものである。しかし，先にも触れ，また後にも続稿中で明らかになるように，1）初期段階における無意図的＜成り済まし＞が後の意図的＜成り済まし＞のきっかけになる，ということを考えた場合，2）また，その多様性を考えた場合，無意図的＜成り済まし＞をも包摂した理論を作る必要があると思われる。

次に，＜成り済まし＞は社会的なものである，という考え方を検討しよう。既にいくつかの例の中で紹介した「白い黒人」に典型的に見られるように，「そのような境界上にいる人間を人種的に同定するということは，生物学的というよりは社会学的である。つまり，そのような人間の『人種』を本当に決めている要因は，人々が彼らの先祖をどの程度知っているか」(Drake and Cayton, 1945：165) ということなのである。したがって，「＜成り済まし＞というのは，個人の生物学的分類よりは社会的定義が大きく変化することである」(Myrdal, 1944：129) と言われている。このような考え方に，われわれも基本的に同意しよう。ただ，二つのことをつけ加えておこう。第一に，＜成り済まし＞が社会的であるという時，そこには，1）人間の分類が社会的である，という側面と，2）＜成り済まし＞の動因の一つとなる社会的分離（segregation）が社会的である，という側面が存在する。第2に，＜成り済まし＞に関するこの性質は，後に，移行可能性という概念の導入によって，明確に定式化されるであろう。

＜成り済まし＞は，黒人から白人へ，というものに見られるように，実際問題としては (for practical purpose)，階層の下から上へのものである (Myrdal, 1944：683) という考え方も，かなり一般的である。しかし，1）黒人から白人

への＜成り済まし＞だけではなく，白人から黒人への＜成り済まし＞も存在すること（〔例３．３〕，〔例３．４〕），２）一度白人に＜成り済まし＞た黒人が，もう一度黒人に戻るという現象も見られること（後述――続稿），という二つの理由により，われわれは＜成り済まし＞を一方向のものには限定しない。一定の階層構造のもとで何故このような二方向の動きが存在するのか，という点については，後に，主観的期待効用という概念を導入して明らかにする。*16

ところで，われわれは前稿（海野・鏡，1979）において，「パッシングという考え方（Goffman, 1963）は移行可能性と可視性の複合概念と考えられる。」と記した。ここに記したように，＜成り済まし＞を可視性と移行可能性との複合概念として考え，しかも＜成り済まし＞と移行とを概念的に明確に区別することが，非常に重要である。それが欠けていると，「女は男に＜成り済ます＞ことが出来ない」(Dworkin, 1976 : 397)，ということになる*17

しかし，女も男に＜成り済ます＞ことはできる。女に出来ないのは，男に移行することなのである。

ここで，＜成り済まし＞と移行との区別を明確にしておこう。移行というのは，社会的に承認された境界を，その人の属性の変化によって横断し，別のカテゴリーに属するようになることである。すなわち，個体の性質そのものが変るのである。たとえば，壮年の人間が老人になる，両足のあった男が交通事故で両足を切断する，リベラリストがアナキストになる，高校卒の人が大学に入学・卒業することによって大学卒になる，などの例が考えられる。これに対して，＜成り済まし＞というのは，本人の属性そのものは何ら変化しないが，社会的認知の誤りによって別のカテゴリーに属するようになることである。すなわち，個体の性質（個体を特性づける変数の値）は変らずに，その認知だけが変るのである。白い黒人が白人とみなされる，というのが典型的な例であるが，次のようなものも考えられる。たとえば，アナキストは，黙っていれば「普通の人」と思われるかもしれない〔何もしないという意図的ないし無意図的行為による＜成り済まし＞〕。老人は，体操や化粧などによって，壮年とみなされる

かもしれない。

以上の議論から，＜成り済まし＞の生じる必要条件の一つが，移行の制御可能性が低い場合であることが明らかになった。たとえば，黒人，在日朝鮮人，部落民，アイヌなどは，カテゴリーの定義が変化しない限り，移行不可能である。前科者というカテゴリーは，現在の状態ではなく過去の経歴によって定義されるので，「前科のない人」には移行できない。低学歴者は，原理的には移行可能である。しかし，妻と子供二人をかかえた30過ぎの中卒者にとっては，これから高校・大学を卒業することは，現在の日本においては非常に困難であろう。

しかし，移行可能性が低いということは，必要条件の一つにすぎない。可視性が小さいことなど，その他にも＜成り済まし＞が生じるための条件は存在する。これらの条件については，＜成り済まし＞のメカニズムを議論する次の章以下で明らかになるだろう。*18ここでは，＜成り済まし＞とは何か，ということに関する本章全体の議論の結論として＜成り済まし＞の定義を与え，この章の結びとしよう。

〔定義〕＜成り済まし＞

ある社会において，あるカテゴリーAに属する人間が持つべき条件J_Aについてコンセンサスが存在すると仮定する。次に，この条件J_Aを満足する人間aを考える。すなわち，$a \in A$である。さて，aがある状況Sにおいて$a \notin A$と判断された場合，aはSにおいてAから$\bar{A}$（Aでないカテゴリー）に＜成り済まし＞たという。

§2．＜成り済まし＞の意志決定

前章で明らかにした＜成り済まし＞の本性を基盤とし，かつ，＜成り済まし＞の生起に関する既存の知見を素材としつつ，＜成り済まし＞の理論を構築し，

そのプロセスを説明・予測しようというのが，本章の目的である。

§2．1．基本モデル

これまでの議論から，＜成り済まし＞は次のようにして成立することが示唆される。

(1) 少くとも二人の当時者が存在する。すなわち，＜成り済まし＞をする（あるいは，しない）「行為者」(a)と，Aが＜成り済まし＞をしているか否かを判断する「認知者」(c)である。

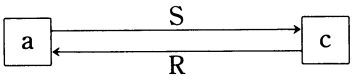
(2) aはある状況において，何らかの行動をとる。これらの総体がcにとっての刺激Sとなる。

(3) cはSにもとづいて，何らかの反応Rをする。このRは，aにとっては，Sに対するフィード・バックである。

(4) このようにaとcとは相互作用をする。

以上のイメージを図式化すると，図1のようになる。

図1　行為者Aと認識者Cとの間のフィード・バック



したがって，＜成り済まし＞のダイナミズムを定式化するためには，AとCの両者について意志決定モデルを定立し，次にその間の相互作用をもモデルに組み込む必要がある。

§2．2．行為者の評価モデル：SEU モデル

さて，以上のような基本的了解の上に立ったとしても，採用しうるモデルには，種々のものがありうる。われわれはここで，個体の意志決定が，各代替案の評価と，それらの代替案の比較・選択という二つの側面を有している，と考えることにしよう。そして，評価モデルとしては主観的期待効用モデル[*19]（Subjective Expected Utility Model, SEU モデル）を採用することにしよう。比較・選択モデルについては，節を改めて述べることにする。

SEU モデルの基本型は，次のように表わされる。

$$SEU\ (A_i) = \sum_{j=1}^{n} \{P(O_j \mid A_i) \times U(O_j)\} \cdots (1)$$

ここで，

A_i：i 番目の代替案（alternative）

O_j：j 番目の結果（outcome）

$P(O_j \mid A_i)$：A_iを選択したときに O_jが生起する確率

$U(O_j)$：O_jの効用（utility）

$SEU(A_i)$：A_i の主観的期待効用（subjective expected utility）

である。

次に，このモデルを<成り済まし>現象に適用してみよう。

第一近似として，次のような単純化を行なう。

(1) 社会Sが2つのカテゴリーから成っているとし，各々のカテゴリーに含まれる人の集合を B，$\bar{B}$とする。*20

$B \cup \bar{B} = S$

$B \cap \bar{B} = \phi$（空集合）

(2) 行為者 a はBに属する。

$a \in B \cdots (2)$

(3) 行為者 a のとりうる代替案は，次の2つである。

A_B：Bとして行動する。（素顔のままの行動）

$A_{\bar{B}}$：$\bar{B}$ として行動する。（<成り済まし>行動）

(4) 認知者 c のとりうる代替案は，次の2つである。

C_B：行為者 a はBに属する（$a \in B$）と認知する。（正しい認知）

$C_{\bar{B}}$：行為者 a は $\bar{B}$ に属する（$a \in \bar{B}$）と認知する。（<成り済まし>許容）

このように考えると，表4に示すように四つの場合が生じうる。

ここで，行為者 a にとっての SEU モデルを考える。a にとっての代替案は A_B，$A_{\bar{B}}$の二つである。結果は，認知者 c の認知 C_B，$C_{\bar{B}}$の二つである。従って，a にとっての SEU モデルは，次のようになると考えられる。

＜表４＞　＜成り済まし＞の結果

行為者 a ＼ 認知者 c	C_B	$C_{\bar{B}}$
A_B	基本事象	無意図的 ＜成り済まし＞
$A_{\bar{B}}$	＜成り済まし＞ 発　　覚	意 図 的 ＜成り済まし＞

$$SEU(A_B)=P(C_B \mid A_B)\cdot U(C_B)+P(C_{\bar{B}} \mid A_B)\cdot U(C_{\bar{B}})\cdots(3)$$

$$SEU(A_{\bar{B}})=P(C_B \mid A_{\bar{B}})\cdot U(C_B)+P(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})\cdot U(C_{\bar{B}})\cdots(3')$$

この二つの式を検討しよう。まず，基本型(１)式を＜成り済まし＞事象に直訳すると，(３)，(３′)式の成分は，次のような意味をもつはずである。

$SEU(A_B)$：Bとして行動した時の主観的期待効用

$SEU(A_{\bar{B}})$：$\bar{B}$ に＜成り済まし＞た時の主観的期待効用

$P(C_B \mid A_B)$：Bとして行動した時にBと認知される確率（基本事象確率）

$P(C_{\bar{B}} \mid A_B)$：Bとして行動した時に $\bar{B}$ と認知する確率（無意図的＜成り済まし＞成立確率）

$P(C_B \mid A_{\bar{B}})$：$\bar{B}$ として行動した時にBと認知される確率（＜成り済まし＞発覚確率）

$P(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})$：$\bar{B}$ として行動した時に $\bar{B}$ と認知される確率（意図的＜成り済まし＞成功確率）

$U(C_B)$：Bと認知された時の効用

$U(C_{\bar{B}})$：$\bar{B}$ と認知された時の効用

だが，これらの意味づけは正しいだろうか。

二つの主観的期待効用，四つの条件については，これでよいだろう。しかし，効用については，若干問題がある。それは，$U(C_B)$，$U(C_{\bar{B}})$ が，ともに絶対的な概念であって，条件付の概念ではないからである。すなわち，われわれがここで問わなければならないのは，$U(C_B)$，$U(C_{\bar{B}})$ は，それぞれaのとる代替案が A_B の時も $A_{\bar{B}}$ の時も等しいか，という問題であろう。$U(C_B)$，すなわちaがBであると認知

される（たとえば，黒人が黒人と認知される）場合の効用は，aのとる代替案がA_Bであっても$A_{\bar{B}}$であっても同じだろうか。表4を見れば分かるように，この場合の効用は，それぞれ，基本事象の効用，<成り済まし>発覚の効用に相当する。たとえば，黒人－白人という関係で考えた場合，黒人が初めから黒人として遇される場合と，<成り済まし>が発覚した場合では，扱いは同じではないだろう。後者には制裁が加えられる可能性がある。他方，$U(C_{\bar{B}})$，すなわちaが$\bar{B}$であると認知される（たとえば，黒人が白人と認知される）場合の効用は，等しいと考えてよいように思える。実際，たとえば黒人から白人への<成り済まし>が成立した場合を考えると，それが無意図的なものであろうと意図的なものであろうと，彼が白人として遇されることには変りがないだろう。しかし，効用という概念は，顕在的な「遇され方」だけによって決定されるのではない。この場合の効用は，行為者aにとっての効用なのである。ところで，aが<成り済まし>を意図した場合としなかった場合では，同じ「遇され方」が異なった意味を持ってくると考えるのが自然である。したがって，aが代替案としてA_Bをとったか$A_{\bar{B}}$をとったかによって，cが$C_{\bar{B}}$をとった場合の効用は異なると考えられる。

以上の議論に基づいて，われわれは，$U(C_B)$，$U(C_{\bar{B}})$に代るものとして，次のような「条件付効用」の概念を導入しよう。

$U(C_B \mid A_B)$：aがBとして行動した時に，cにBと認知された場合の効用（基本効用）

$U(C_{\bar{B}} \mid A_B)$：aがBとして行動した時に，cに$\bar{B}$と認知された場合の効用（無意図的<成り済まし>効用）

$U(C_B \mid A_{\bar{B}})$：aが$\bar{B}$として行動した時に，cにBと認知された場合の効用（<成り済まし>発覚効用）

$U(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})$：aが$\bar{B}$として行動した時に，cに$\bar{B}$と認知された場合の効用（意図的<成り済まし>効用

すると，(3)式，(3′)式は，それぞれ，次のように書きかえられる。

$$SEU(A_B) = P(C_B \mid A_B) \cdot U(C_B \mid A_B)$$

$$+P(C_{\bar{B}} \mid A_B)\cdot U(C_{\bar{B}} \mid A_B)\cdots(4)$$

$$SEU(A_{\bar{B}}) = P(C_B \mid A_{\bar{B}})\cdot U(C_B \mid A_{\bar{B}})$$

$$+P(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})\cdot U(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})\cdots(4')$$

(4)式，(4')式が，<成り済まし>に関する行為者aのSEUモデルである。

§2.3. 行為者の選択モデル：閾値モデル

それでは，上記のようなSEUモデルによって代替案の評価を行なった行為者aは，実際にはどの代替案を選択するのだろうか。

幸いなことに，この場合の代替案の数は2にすぎない。

したがって，多くの代替案をどのように比較し，その中からどれを選択するか，ということは，この場合には，ほとんど問題にならない。われわれは，行為者aの代替案選択について，次のような仮定をしよう。

〔代替案選択に関する仮定〕

$$SEU(A_{\bar{B}})-SEU(A_B)\begin{cases} >\alpha & : A_{\bar{B}}\text{を選択} \\ \leqq\alpha & : A_B\text{を選択} \end{cases}$$

ここで，αは，aが$A_{\bar{B}}$の選択をするための閾値である。

さて，ここで次のように略号を定める。

$$SEU_- = SEU(A_{\bar{B}}),\ SEU_+ = SEU(A_B)$$

$$p_{--} = P(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}}),\ u_{--} = U(C_{\bar{B}} \mid A_{\bar{B}})$$

$$p_{+-} = P(C_B \mid A_{\bar{B}}),\ u_{+-} = U(C_B \mid A_{\bar{B}})$$

$$p_{-+} = P(C_{\bar{B}} \mid A_B),\ u_{-+} = U(C_{\bar{B}} \mid A_B)$$

$$p_{++} = P(C_B \mid A_B),\ u_{++} = U(C_B \mid A_B)$$

すると(4)，(4')式から，次のような式が導かれる。

$$\begin{aligned} f &= SEU_- - SEU_+ \\ &= p_{--}u_{--} + p_{+-}u_{+-} - (p_{-+}u_{-+} + p_{++}u_{++}) \\ &= (1-p_{+-})u_{--} + p_{+-}u_{+-} - p_{-+}u_{-+} - (1-p_{-+})u_{++} \\ &= u_{--} - u_{++} + (u_{+-} - u_{--})p_{+-} - (u_{-+} - u_{++})p_{-+} \end{aligned}$$

$$=f(u_{--},\ u_{+-},\ u_{-+},\ u_{++},\ p_{+-},\ p_{-+}) \quad \cdots(5)$$

ここで，効用の相対的大きさについて，次のように仮定するのは，自然であろう。

$$u_{--}>u_{-+}>0.0>u_{++}>u_{+-} \quad \cdots(6)$$

すると，(5)式を偏微分した結果は次のようになる。

$$\frac{\partial f}{\partial p_{+-}}=u_{+-}-u_{--}<0 \cdots\cdots(7)$$

$$\frac{\partial f}{\partial p_{-+}}=-(u_{-+}-u_{++})<0 \cdots\cdots(8)$$

$$\frac{\partial f}{\partial u_{--}}=(1-p_{+-})>0 \cdots\cdots(9)$$

$$\frac{\partial f}{\partial u_{+-}}=p_{+-}>0 \cdots\cdots(10)$$

$$\frac{\partial f}{\partial u_{-+}}=-p_{-+}<0 \cdots\cdots(11)$$

$$\frac{\partial f}{\partial u_{++}}=-(1-p_{-+})<0 \cdots\cdots(12)$$

ところで，先に示した「代替案選択の仮定」を認めるとすれば，αを一定とした場合，fの値が大きいほど<成り済まし>を試みる(すなわち，aが$A_{\bar{E}}$を選択する）可能性は増大する。したがって，(7)式から(12)式までの意味を整理すると，いささか常識的すぎるが，次のようになる。

<成り済まし>の意志決定：モデルからの演繹

i）<成り済まし>を試みる可能性を増大させるのは，意図的<成り済まし>効用（u_{--}）の増大，<成り済まし>発覚効用（U_{+-}）の増大——すなわち，発覚した場合の制裁の減少——である。

ii）<成り済まし>を試みる可能性を減少させるのは，<成り済ま

し＞発覚確率（p_{+-}）の増大，無意図的＜成り済まし＞成立確率（P_{-+}）の増大，無意図的＜成り済まし＞効用（u_{-+}）の増大，基本効用（u_{++}）の増大，である。

また，〔代替案選択に関する仮定〕から

iii）αの増大は，＜成り済まし＞を試みる可能性を減少させる。

ことが分かる。

§2．4．行為者モデルの評価：経験的事実との照合

ここで，これまでに述べたモデルを経験的事実と照合し，その妥当性を検討しよう。

はじめに注意しなければならないことは，前節までに定式化したモデルは，行為者の評価と選択に関するモデルであって，＜成り済まし＞現象全体のモデルではない，ということである。したがって，ここで照合すべき経験的事実というのは，＜成り済まし＞の現象自体――たとえば，都市では地方よりも＜成り済まし＞が多い――ではなく，行為者が＜成り済まし＞をしようとするか否か――たとえば，都市では，地方よりも＜成り済まし＞をしようとするか否か――ということである。

先行研究者たちは，従来，次のように考えてきた。＜成り済まし＞をしようとするのは当然である。その方が（本稿の用語を用いれば）効用が大きいからである。しかし，＜成り済まし＞が出来るのにしない黒人が数多くいるのは，なぜだろうか。彼らはこのような問いかけに対して，次のように答えている。

Berry and Tischler（1978：393－4）によれば，＜成り済まし＞の阻止要因は，次のようなものである。

（B 1）発覚に対する恐れ

（B 2）友人や家族に対する忠誠

（B 3）自分の属する集団に対する誇り

（B 4）これまで持っていた地位を失なう

（B５）自分の属する集団から好意的評価を受けることが少ない。（ただし，この点は微妙である。）

また，Conyers and Kennedy（1963）も，＜成り済まし＞ができる黒人が＜成り済まし＞をしない理由として，次の７項目を挙げている。

（C１）あとで発覚するのではないか，という恐れ

（C２）民族に対する自覚と誇り

（C３）家族や親友に対する忠誠

（C４）白人に＜成り済まし＞た後，孤独になるのではないかという感覚

（C５）白人の世界で地位や評価を失なうことが考えられること

（C６）＜成り済まし＞が成功するとは限らない

（C７）＜成り済まし＞をするには十分に計算された計画が必要だと考えられていること

これらは，先にあげた Berry and Tischler のものと非常によく似ている。

他方，Myrdal（1944：686）は，＜成り済まし＞の出来る黒人がそれほど＜成り済まし＞をしないのは，１つには，

（M１）民族に対する誇りや使命感

のためであろうが，そのために＜成り済まし＞をしないのは一部の人達であって，大部分の人達の場合には，次にあげるような理由によるのであろうと考え，ある黒人青年の内省報告をあげている。彼によれば，それは次の通りである。

（M２）素性が発覚する恐れから，常に緊張していなければならない

（M３）黒人のコミュニティーの中では，（彼は色が白く，しかも教師なので）上層にいられるが，白人の中に入ったら多数者の中の一人である

（M４）黒人の有資格者が少ないので，黒人でいた方が就職しやすく，出世しやすい

（M５）黒人のコミュニティーの上層にいた方が社交生活が楽しい

以上を統合すると，＜成り済まし＞のできる黒人が＜成り済まし＞をしない

理由として次の項目が考えられる。

(1) 発覚に対する恐れ（B 1，C 1，M 2）

(2) 家族，親友への忠誠（B 2，C 3）

(3) 自民族に対する誇り

(4) 職業上，その他の地位が高くなるとは限らない（B 4，C 5，M 3，M 4）

(5) 黒人の世界の方が楽しい（B 5，C 4，M 5）

(6) <成り済まし>が成功するか否か分らない（C 6）

(7) 準備が必要（C 7）

これらの理由を，前節で導出した(7)−(12)式と照合しよう。

(1) 発覚に対する恐れは，二つの成分，すなわち，発覚の確率，発覚した場合の制裁，に分解でき，各々は p_{+-} に関する(7)式，u_{+-} に関する(10)式によって説明できる。(2)，(3)，(4)，(5)は，それによって現在の効用を大きくしている要因である。したがって，U_{++} に関する(12)式によって説明される。(6)は，発覚確率 p_{+-} そのものである。(7)は，<成り済まし>を阻害する「慣性」であるから，上記の定式化においては，α で表現される。

以上で，われわれの提出した，行為者の評価モデル，選択モデルが，非常に単純なものであるにもかかわらず，行為者の意図を予測しうることが明らかになった。

〔付記〕

今後の課題

この他にも，種々の経験的事実が報告されているが，それらについては，稿を改めて述べる。

また§2の冒頭に示したように，<成り済まし>現象全体を理論化するには，以上に記した行為者のモデルの他に，評価者のモデル，および，両モデル間の相互作用を扱かわなければならない。それに関しても稿を改めて述べたい。

(1979年10月18日，シカゴにて脱稿)

引用文献

Allport, Gordon W.
1954 The Nature of Prejudice. Reading, Mass : Addison-Wesley.
Berry, Brewton.
1958 Race and Ethnic Relations. (2nd ed.) Boston : Houghton Mifflin.
Berry, Brewton and Henry L. Tischler.
1978 Race and Ethnic Relations. (4th ed.). Boston : Houghton Mifflin.
Blalock, Hubert M., Jr. and Paul H. Wilken.
1979 Intergroup Process : A Micro-Macro Perspective. New York : Free Press.
Broom, Leonard, Helen P. Beem, and Virginia Harris.
1955 "Characteristics of 1108 petitioners for change of name," American Sociological Review. 20 : 33−39.
Conyers, James E. and T. H. Kennedy.
1963 "Negro Passing : To Pass or Not to Pass," Pylon 24 : 215−223.
Drake, St. Clair and Horace R. Cayton.
1945 Black Metropolis : A Study of Negro Life in a Northern City. New York : Harper, Brace & World.
Dworkin, Rosalind J.
1976 "A Woman's Repaort," pp.373−399 in Anthony Gary Dworkin and Rosalind J. Dworkin (eds.), The Minority Report : An Introduction to Racial, Ethnic and Gender Relations, New York : Praeger.
Goffman, Erving.
1963 STIGMA : Notes on the Management of Social Identity. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall. 石黒毅訳『スティグマの社会学』東京：せりか書房（1970)。
Hughes, Everett C. and Helen M. Hughes.
1952 Where People Meet : Racial and Ethnic Frontiers. Glencoe, Ill. : Free Press.
富田浩人（編著）
1977 『653人——在日朝鮮人』東京：すずさわ書店。
Myrdal, Gunner.
1944 An American Dilemma : The Negro Problem and Modern Democracy. New York : Harper.
Parsons, Talcott.
1975 "Some theoretical considerations on the nature and trends of change of ethnicity," pp.53−83 in Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan (eds.), Ethnicity :

概念である。

2）状況に対するマイノリティーの対応に関しては，その他にも，種々の類型化が試みられている。ここでは，それらの個々に言及することは避けるが，"passing" に関しては，Simpson and Yinger (1972) の用語法についてだけ注意しておきたい。彼らは，マイノリティーの反応の基本型として，avoidance, aggression, acceptance の三つを提示し，avoidance の一形態として "passing" をあげている。多くの文献が，Berry and Tischler (1978) と同様に，assimilation（ないし，それと類似の概念）の中に "passing" を位置づけているのに対して，Simpson and Yinger のこの用語法は，やや特殊であるように見える。だが，これは，彼らの類型化が，マジョリティーに対する反応に関する分類ではなく「差別」に対する反応の分類である，ということによって説明できるものと思われる。

3）以下，本稿に記す種々の例の中には，現代社会の現状を記述するものとしては，必ずしも正しくないものがある。しかし，本稿の目的は，<成り済まし>の理論構築にあるので，現在では存在しない現象をも採用した。

また，島崎藤村の『破戒』に見られるように，日本にも<成り済まし>が存在する。部落民，朝鮮系の人，アイヌなどが，いわゆる「日本人」に<成り済ます>のである。しかし，この点に関しては，手許に十分な資料がないので他日を期したい。

4）南アフリカでも，同様のことが知られている (Hughes and Hughes, 1952 : 103)。また，日本において多くの日本人がもつ「朝鮮人」というカテゴリーも，そのようなものであろう。すなわち，大韓民国ないし朝鮮民主主義人民共和国の国民は当然のことながら，日本国籍をもつ人であっても，日本人と朝鮮（ないし韓国）人との混血児，韓国・朝鮮籍から帰化した人なども，社会的には「朝鮮人」として扱われることが多い（宮田，1977：197)。

5）たとえば，(Myrdal, 1944: 687)。

6）Broom et. al. (1955) によれば，ロス・アンゼルス・カウンティーに名前の変更を申請した 1108 人のうち，46 パーセントがユダヤ人であった。ちなみに，この地区の人口中，ユダヤ人は，わずかに 6 パーセントであった。

7）この例は，四版 (Berry and Tischler, 1978) では完く削除されてしまっているが，(Zanden, 1966 : 404) に簡単に紹介されている。

8）以下の〔例 3．6〕から〔例 3．9〕までの出典は，(Stonequist, 1937 : 199)。

9）正しくは，「イタリヤ系の人」と書くべきだが，繁雑なため，イタリヤ人と略記する。以下の，ポーランド人，ドイツ人等も同様。

10）本項の例は，(van den Berghe, 1978 : 46－49) による。

11）前述のアメリカにおける「黒人」の定義と対照せよ。

12）本項は，(van den Berghe, 1978 : 62－72) による。

13）たとえば，(Allport, 1954 : 146) は，permanent, opportunistic and temporary, partial, deliberate などの下位カテゴリーを上げているが，これは (Stonequist, 1937) にすべて包

まれている。(Berry and Tischler, 1978 : 393) も，conscious-unconscious, temporary-permanent という区別を研究者はしてきた，と述べているに止まっている。

14)「同定」というのは，確立されたカテゴリーの集合の中に，観察されたものを当てはめることである。詳しくは，(安田•海野，1977：201－202) を参照。また，「同定に関する行為者の提案」というのは，行為者がその行為によって示唆するカテゴリーのことである。たとえば，〔例a〕においては，行為者は白人専用の美容室に行くことによって，「私は白人ですよ」と提案したのである。また，〔例c〕においては，黒人用の座席に座ることによって，「私は黒人ですよ」と提案している。それにもかかわらず，彼(女)は白人と認知されたのである。

15）ただし，今後とも，意図的，無意図的という言葉は用いる。その意味は，先に述べた通りである。

16) 紙幅の都合で，本稿内に収めることは出来ないが，続稿の中で扱われる。

17）彼女によれば，マイノリティーによっては，個人が＜成り済ます＞ことが出来るが、女には＜成り済まし＞が出来ないから、この点が女性解放運動の強味である，という。しかし，女性解放運動が（たとえば）黒人解放運動に比べてどのような強味と弱味を持っているかは，「自己完結性」をはじめ，われわれが前稿においてとりあげたような特性を用いて総合的に判断すべきことである。

18) この点に関する議論は，続稿で扱われる。

19) SEUモデルについては，たとえば，(Blalock and Wilken, 1979 : Chap2-Chap4) を参照。

20) たとえば，Bを黒人，$\bar{B}$を白人（非黒人）と考える。